

報告書

令和7年7月22日（月）から24日（水）まで会派の行政視察のため、青森県東北町、むつ市、久保 修 紙のジャポニスム ～切り絵 線のかたち～ AOMORI を視察しましたので、下記のとおり報告いたします。

記

令和7年8月9日

美祢市議会
議長 荒山 光広 様

新政会
会長 戎屋 昭彦
荒山 光広
三善 庸平

1. 視察の目的

今回は2つの自治体と美祢市ふるさと交流大使である久保修の展示会を視察した。それぞれの理由を下記に記す。

（青森県東北町）

青森県東北町は人口が1万5000人、日本で11番目に大きな湖小川原湖を有する自治体である。こちらの観光としての取り組みとしてこの小川原湖を中心としたアウトドア観光に力を入れており、その人材の担い手として地域おこし協力隊を活用した取り組みが美祢市においても参考になるのではないかと考え今回の視察先とした。また、農業においてはにんにくやごぼうの出荷量が全国でもトップクラスであり、地元産のブランド力向上に力を入れている点も学ぶ点があると考えた。

（青森県むつ市）

青森県むつ市は本州最北端のジオパーク、下北ジオパークを有する自治体である。日本ジオパークに2度再認定されており、2032年度を目途に世界ジオパーク認定を目指している。美祢市と同様にジオパークを推進する自治体としてジオパーク活動の課題、市民のジオパークに対する見解等を聞くことで美祢市にフィードバックできると考えた。

（1）美祢市の現状

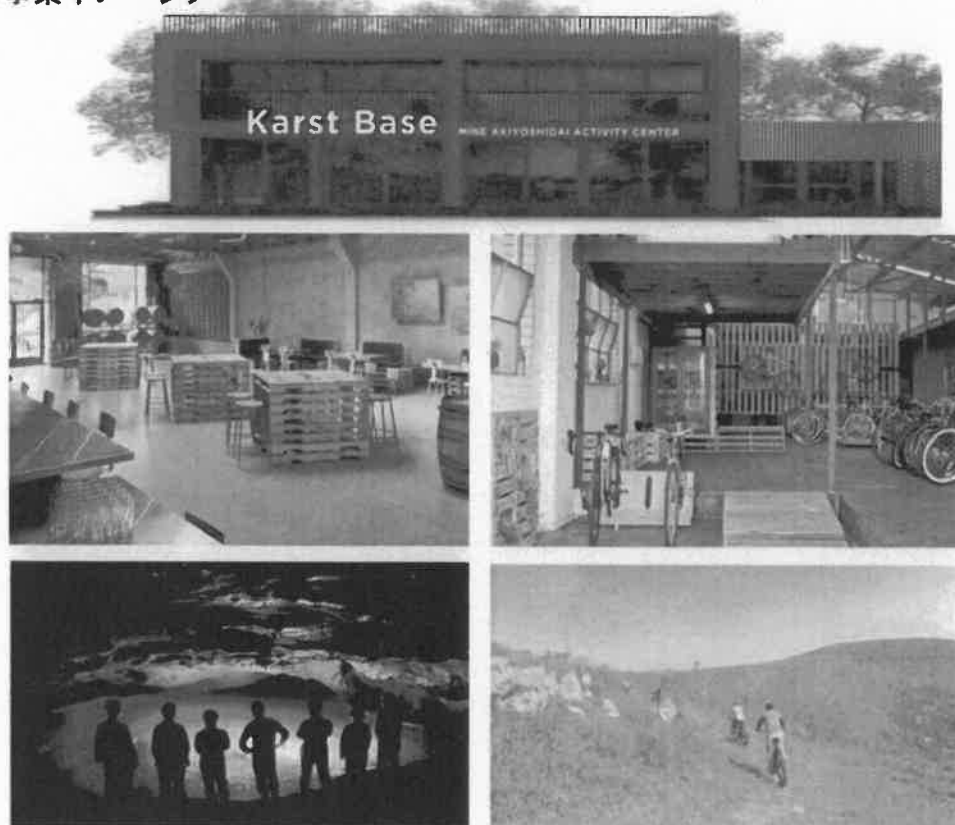
・アウトドア観光について

令和6年度山口ならではの特別な体験創出支援事業補助金の採択を受け、秋吉台



洞を繋ぐアクティビティ拠点を核とした美祢市ならではのアウトドアツーリズム創出事業採択事業を展開する。事業概要としては秋吉台・秋芳洞のアウトドアアクティビティのワンストップサービス拠点（アクティビティセンター）の整備。（ツアー商品販売、アウトドア用品レンタル、更衣室やシャワールーム等のツアー発着点機能、観光情報発信、オリジナルグッズ販売）

<事業イメージ>



美祢市の農業について

美祢市の農業は、「厚保くり」「秋芳梨」「美東ごぼう」などの特産品を有しているものの、担い手不足等により存続の危機に直面している。新規就農者確保に向けた研修や施設整備など経営初期支援などを行っており、認定新規就農者数は順調に増加し定着する一方、農業者の高齢化、後継者不足により将来農業経営が困難となることが予想される地域が数多く存在し、担い手の育成、確保に向けた一連の支援体制を確保することが必要となる。

目標指標

項 目	基 準 値	目 標 値
農業産出額	329千万円	347千万円
認定新規就農者数(累計)	18人	24人
担い手への農地の集積率	39.1%	60%
土地改良事業実施率	48.0%	58%
ほ場整備率	85.6%	88%
遊休農地面積	46.5ha	37.5ha

・青森県東北町

人口：15,044人

面積：326.50km²

・財政状況

一般会計歳入総額：131億4,244万円

一般会計歳出総額：125億6,857万円

地方債残高：105億2,692円

充当可能財源等：138億7,972万円

実質赤字比率：赤字なし

連結実質赤字比率：赤字なし

実質公債費比率：12.2%

将来負担比率：82.5%

財政力指数：0.31

経常収支比率：92.7%

東北町の概況

自然的条件の概要

○位置と地勢

本町は、青森県の東部、上北地方のほぼ中央部に位置し、県東部の空の玄関口である三沢空港を有する三沢市、東北・北海道新幹線七戸十和田駅を有する七戸町及び地域の中心都市である十和田市に隣接しているほか、県都青森市、県南部地方の拠点都市である八戸市からも約40km圏内に位置するなど、恵まれた立地条件にある。

地勢は、東西30.3km、南北29.5km、総面積326.50km²の町で、八甲田山系の山々から続く丘陵地、台地が大部分を占めるほか、七戸川、砂土路川などの河川沿いに平坦地が広がっており、東部一帯には湖沼としては県内で最大、全国でも11番目の面積を誇る汽水湖の小川原湖がある。

本町北西部の旧東北町区域は、東西約27km、南北約21km、総面積207.23km²を有する平坦地が少ない地勢条件にあり、国有林を含む森林・原野及び農用地が総面積の約9割を占め、豊かな自然を生かした農林水産業が基幹産業の区域である。

本町南部の旧上北町区域は、東西約17km、南北約20km、総面積119.27km²を有するおおむね平坦な地勢条件にあり、総面積の半分以上を占める小川原湖での漁業をはじめ、農林水産業が基幹産業の区域である。

・アウトドア観光について

小川原湖ふれあい村を中心としたアウトドア観光開発

小川原湖ふれあい村では、利用者の満足度や利便性を向上させていくため、サービスの充実化や各種インフラの整備を進めている。小川原湖ふれあい村を中心としたアウトドア観光開発の他、宿泊予約システム構築などを地域おこし協力隊を活用して進めていく

◆活動イメージ◆

- ・東北町や小川原湖ふれあい村の現状を知り、観光資源や利用者ニーズを調査。
- ・地域活性化起業人と協力し、宿泊施設の予約システム構築などの観光DXに取り組む。
- ・調査したデータを活かし、小川原湖ふれあい村を中心としたアウトドア観光コンテンツ

を企画・運営。

- ・小川原湖ふれあい村の観光に関する PR 活動を実施。
- ・事業の PDCA を回してブラッシュアップしながら、アウトドア観光コンテンツのバージョンアップを図る。
- ・取組の幅を拡大していき、町内の各種観光関連イベントの企画・運営にも携わる。

3. 東北町の農業、観光における問題点及び今後の課題

東北町は、小川原湖を中心にした水辺の風景や豊かな農水産物、四季折々の自然、温泉、さらには地域色豊かな伝統行事を有する、観光と交流の資源に恵まれた町である。しかしながら、こうした魅力ある地域資源は十分に掘り起こされておらず、地域の観光産業として継続的に活用できる仕組みづくりには至っていないのが現状です。特に、体験型観光や長期滞在型のコンテンツ造成が進まず、観光資源が「あるだけ」にとどまってしまっている点が課題。

東北町ではこれまで交流人口の拡大を通じた地域活性化に取り組んできた。たとえば桜まつりや湖水まつりなどのイベントを通じて観光誘致を図り、平成 30 年度には観光客数 47.6 万人を記録するなど、一定の成果を上げてきた。さらに令和 7 年度には観光客数 51 万人を目標に掲げている。しかしこれらのイベントは一過性の集客にとどまり、地域経済に持続的な波及を生む仕組みや、来訪者が再訪・移住を検討するような魅力発信にはつながっていない。

また、観光資源そのものの掘り起こしや情報発信も課題であるとのこと。地元の伝統や食文化、暮らしの知恵といった「ソフト資源」は地域内に存在するものの、それらを体験プログラムとして観光商品化する動きが弱く、観光客にとっての新しい発見や感動につながっていません。広域観光連携やインバウンド対応の取り組みも道半ばであり、交通インフラの整備進展（上北自動車道・新幹線・空港）を観光資源の活性化に結びつける戦略も強化が必要である。

このように、東北町においては「資源はあるが活かしきれていない」という構造的な問題を抱えており、今回の地方創生事業は、まさにその課題解決に向けた重要な施策である。今後は、空調設備などハードの充実と、体験型観光や地域資源のコンテンツ化といったソフトの創出の両輪で、「訪れる町」から「暮らしたくなる町」へと進化させていく必要がある。

② アウトドア観光をもとに地域おこし協力隊を募集したきっかけ

課題解決のための取組として、代表的観光地である小川原湖観光、小川原湖ふれあい村をはじめとした観光施設の改善や各種イベント等の企画運営、宿泊施設の予約システムなどの観光システム構築、その他観光 PR などにおいて、地域おこし協力隊の役割に相応しいと判断し、募集に至る。

③ 上記を進めたうえで発生した課題

本取組の連携先のひとつであり、町の観光の中心ともいえる「道の駅おがわら湖」に対して、現在、指定管理をお願いしている観光施設に関して、内容の見直しや魅力の向上について、県も含めた協力体制のもとで取り組みを提案している。

しかしながら、改善すべき課題が多くあるにもかかわらず、現在の状況にある程度の満足感があり、意欲的な取り組みには今ひとつつながっていないため、地域おこし協力隊を含めた関係者と気持ちを一つにして事業を進めていくうえで、やや足並みがそろわない場

面が見受けられる。

とはいえ、協力隊の活動は始まったばかりであり、これからさまざまな課題が出てくることが予想されるが、現時点では、協力隊員の皆さんは与えられた役割に対してとても前向きに、そして高い意識を持って熱心に活動しているとのこと。

また農業においては6次産業の充実化を図り、農家との直接契約等の販路拡大を目指しJA依存からの脱却を目指している。販路については現在道の駅や直売所による出品がメインである。特に6次産業のブランディングに力を入れ、価値の向上を目指し、単価を上げる施策に集中しているとのこと。

4. 今回の視察からの考察、美祢市で実施する上での課題

観光、農業ともに美祢市の課題感と非常に近いものがあると感じた。とはいえ現在美祢市においては体験型観光として未公開洞窟のケイビングツアーや、秋吉台Eバイクツアーの実施など徐々にではあるが体験コンテンツが拡充しているのが著しい。また、来年度にはアクティビティセンターの設立など拠点施設のリニューアルを含め今後のアウトドア観光戦略として光が当たり始めている。しかし、人材の観点からいうとより秋吉台を含めた美祢市の観光発信できる人材が急務である。今回東北町が実施している地域おこし協力隊の活用はこの人材不足に対する施策になると考える。ケイビングツアーの講師を地域おこし協力隊を利用して採用できた成功体験を踏まえ、積極的な人材収集を望む。

◇参考写真



・概要

本州最北に位置する下北ジオパークは、海に面した人々の生活と自然、大地を総合的に体感できるよう、『海と生きる「まさかり」の大地 ～本州最北の地に守り継がれる文化と信仰～』をテーマとしている。恐山や仏ヶ浦、大間崎、尻屋崎などのジオサイトでは、地形・地質に依らず生物・生態系や歴史・文化・産業なども紹介している。

・4つの地質が集結する日本列島の縮図

日本列島の大地は、長い時間をかけて積み重なった4つの要素で構成されており、下北にはそのすべてが集結しており、この多様な地質が、生態系や人々の暮らしの多様性に色濃く影響を与えている。また、3つの海に囲まれて、波の侵食や寒冷地特有の降雪、結氷によって削られた岩の造形は、信仰や伝説を生み出した。

・下北ジオパークの目的

郷土愛の醸成と地域の価値向上

6 今回の視察からの考察

下北ジオパークは2032年度に世界ジオパーク認定を目指すことを目標に現在活動している。実際世界ジオパークに認定されるための特別な地質、歴史などが担当者からすると Mine 秋吉台ジオパークに遠く及ばないため難儀されているとのこと。ただ、市民団体からの強い推進があるため行政としても世界ジオパーク認定のために積極的かつ戦略的に推し進めていく所存のようである。Mine 秋吉台ジオパークと大きな違いを感じる部分として市民団体の推進力である。下北ジオパークサポーターの会というものがあり2017年は個人会員41人、団体会員11だったのに対し2025年3月末において個人会員207人、団体会員63と5倍の進捗を見せる。活動としては海岸清掃活動、地質サイトの清掃活動、ファンミーティングの開催など行政主導よりも民間主導でジオパーク活動が繰り広げられているところが Mine 秋吉台ジオパークとの大きな違いを感じる。

また、なぜそのように市民が積極的にジオパーク活動に取り組んでいるかという背景に2つの理由がある。まず一つは日本ジオパーク、世界ジオパークになり価値を示さないと下北半島に目を向けてもらう手段が乏しくなってしまうことである。2つ目は土地に感謝する気持ちである。これは恐山があることの影響は大きく、また土地土地の人々が土地への感謝を持つことで自発的に海岸の清掃活動に繋がっており、年間2000人が参加している。実際美祢市民の美祢市に対する大地に対しての感謝や秋吉台に対しての感謝する気持ちが何かに表れているかと考えると大きくは伝わってきていないように感じる。逆に言うと秋吉台に対してより感謝する動きを子供たちの教育だけではなく、イベントや企画を通じて美祢市民全体が秋吉台に感謝する働きを醸成すれば、美祢市民の気持ちが一つになるだけではなく、秋吉台に多くの人々が訪れる土壌を形成することができるのではないかと今回の視察で仮説を立てることができた。世界ジオパークはあくまで目的ではなく手段であり、認定されてからの動きが非常に大切である。その中心に積極的に動く市民の姿があるために必要なエッセンスを下北ジオパークから学んだ。

◇参考写真



・久保 修 紙のジャポニスム ～切り絵 線のかたち～ AOMORI

紙のジャポニスム

～Kirié 線のかたち～

KUBO Shu Exhibition AOMORI

久保 修

切り絵画家



制作：青森県立美術館より

2025

7.19 SAT — 8.31 SUN

《会期中無休》

10:00～18:00 (入館は17:30まで)

東奥日報新町ビル 3階New'sホール
(青森市新町2-2-11)

入場料[税込] = 大学生・一般 1,100円(900円)
中高生 800円(700円) / 小学生以下無料

※()内は前売り、および20名以上の団体料金。

※障がい者割引は全て当日券の半額(付添1名無料)、会場チケット売場のみ対応。

前売券取扱所=ローソンチケット(1コード:22602)、ポみっと!
チケット、GETTIS、リンクステーションホール青森、サンロード
青森、成田本店しんまち店、青森県民生活協同組合、さくら野百貨店青森本店・弘前店、ELMインフォメーション

(前売券販売は7月18日(金)まで)

主 催=東奥日報社、東奥日報文化財団 特別協力=久保修切り絵ミュージアム 企画協力=イムラアートギャラリー

特別協賛=東奥日報販売店主会、東北電力、日本郵船、J-POWER 協 賛=青森みちのく銀行、青い森信用金庫

後 援=青森県、青森県教育委員会、青森県観光国際交流機構、青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、エフエム青森、青森ケーブルテレビ、青森市新町商店街振興組合

[問い合わせ] 東奥日報社企画事業部 TEL.017-718-1135(平日9:00～17:00)

開催時期

2025/07/19(土) ～ 2025/08/31(日)

主催

東奥日報社 東奥日報文化財団

概要

日本の四季折々の風景や食材といった、移り変わる自然界の瞬間的な美を切り取って描きつづける美祢市出身の切り絵画家・久保修。阪神淡路大震災での被災経験や 47 都道府県を巡る旅を経て、自然災害によって文化や風景、人々の暮らしが失われていく様子を目の当たりにした久保は、日本の原風景を切り絵にして残していく活動をスタートさせた。その活動は国内にとどまらず、2009 年に文化庁文化交流使に任命されて以降は展覧会やワークショップを計 16 か国以上で開催し、切り絵を通して世界中の人たちに日本文化を紹介している。美しい日本の原風景を切り取って描き、世界や未来に向けて発信しつづけている久保修の初期の作品から、本展のために手掛けた新作「尻屋崎灯台と寒立馬」「春爛漫（弘前城）」までを含む約 150 点の作品を幅広く展示されていた。

◇参考写真

